

[掲載紙] 読売新聞「レンゲツツジ」

[掲載日] 2017年3月6日

[テーマ] 子育ては「ママ上司」「パパ部下」

初めて住む群馬で妻とともに息子2人（2歳と1歳）の育児に奮闘してきた経験について先月26日、大勢の方の前でお話しする機会があった。

育児経験について話をするのは初めてではない。「最近の金融経済情勢」という演題にもかかわらず、司会者の方が「イクメンで有名な神山支店長です」なんてご紹介くださるものだから、「イクメンで有名と言われることがないのは残念です」とかつまらないことを言いながら、少し話をさせていただく、ということはこれまでもよくあることであった。

しかし今回は、演題が「神山一成の子育て奮闘記」である。経済や金融政策の話は一切なしで、主催者からは「支店長のイクメンぶりを2時間存分に使って話してください」と言われている。私の育児経験などたかが知れており、参加者の貴重な時間をそんなにもらって満足していただくなんて無理無理無理。当初は何とか言い訳をつけてお断りしようと考えていた。

それでも最終的に引き受けることにしたのは、対象が「子育て中、または子育て予備軍の男性」であったから。同じ立場の集まりであれば、私がおの方々の経験を聞いてしまえばよい。私の話は導入に過ぎないと考えれば、だいぶ気が楽になる。主催者に対し、私の講演は1時間にとどめ、残りの1時間は交流の時間とするようお願いした。

残る心配は、子育て中の方が日曜日の午後に集まってくれるだろうかということ。平日は育児に多くの時間を割けない男性にとって、週末は挽回のチャンス。パパとの時間を楽しみにしている子供を家に置いて参加してくれるだろうか。

さて当日。インフルエンザで当日キャンセルが出るなど、予定人数には至らなかったが、多くの方に集まっていた。心配はある程度当たり、小さいお子さんをお持ちの参加者は少なかったものの、既にお子さんが中高生の、私からみれば大先輩（確かに「子育て中」）や、まだ高校に在学中の、私からみても大後輩（確かに「子育て予備軍」）の参加がみられたりしたのである。

ここに書き連ねることは出来ないが、参加者と大変貴重なやり取りをさせていただいたと思う。「イクメン」なんて言葉はもはや不要と思えるほど、男性が育児を行うことが特別なことではなくなっていると感じることが出来た。私としても今後に生かせるヒントをたくさん、ちょうだいした。

ちなみに、私の話の中で参加者の反応が良かったのは、「ママは上司でパパは部下。この職場では、パパが『何でこんなことも出来ないの?』としょっちゅう言われているなど、ハラスメントが横行しています。でも、ママは上司になりたてで、まだ余裕がないのだと、広い心で受け止めていきましょう」というくだり。終了後、参加者の一人が笑いながら「あんなこと言って奥さんに怒られませんか?」と声をかけてくれた。

一応、彼女の名誉のために書いておく。うちではママとパパは共同経営者みたいなもので、決して上司部下の関係ではない。それぞれが役割を明確にして、主体的に育児に取り組んでいるのである。もちろんハラスメントもない。えっ、それって奥さんの部下の使い方が非常にうまいだけじゃないかって?

〔 日本銀行前橋支店長  
                  神山 一成 〕